

アイヌ文化のことをもっともっと話したい！
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で
執筆するソノコ(=お便り)形式のエッセイです。

ラスパニ(ノリウツギ)

村木美幸(アイヌ民族文化財団副理事長)



川

でサケを捕るマレク(釣鉤)の鉤を固定する台
木や海獣漁に使うキチ(鉋)と長い柄を繋ぐ

中柄部分をアイヌ語でラスパといい、そのラスパの材に
ノリウツギが使われることからラスパニ(ラスパをつく
る木)の名でノリウツギは呼ばれます。

ノリウツギは、内皮から糊を採取し、木の髄をぬくと
中空となる空木が語源とされ、

別名をノリノキやトロロウツ
ギ、北海道ではサビタと呼ばれ
ます。北海道から九州までの日
当たりが良い山野に自生する
樹高二〜五メートルの落葉低木で、七
〜八月、枝先に伸びた花茎に小
さな白い花が集まって円錐形の
ピラミッド状に咲き、萼が花び
ら状に変化した装飾花をつける
のも特徴です。

ノリウツギの木質部はとても

堅くて重い上に燃えにくく、髄

が柔らかく加工しやすいので、マレクやキチの他にもい
ろいろな道具に使われてきました。矢が真っ直ぐに飛
ぶように鍬を支え、錘の役割をするマカニツ(矢骨、中
柄)の他、アペパスイ(火箸)やアペキライ(灰かき)にも
使われます。また、中空になることから喫煙具のキセ
ルもつくられ、長いものは四十センチを超えるものもあり



イラスト/山丸ケニ

ます。一本の枝からつくられ、枝先を吸い口に、刻みタバ
コを詰める火皿の部分には枝元の曲がった形状を上手
に利用しました。また、木の髄を抜いて筒状の針入れ、
チシポも作ります。針の入手が難しく貴重とされた時
代には、針を紛失したり折ったりしないようにモウル
(肌着)の胸元の紐にチシポを結び肌身離さず携帯し
たといひます。チシポはノリウ

ツギの筒と針を刺すための布か
らなり、その布には、針を引き
出しやすいように古銭などが
付けられています。チシポの表
面には美しい彫文様が施され、
実用性と装飾性を備えたお
しゃれな道具の一つです。

昨年、国宝や重要文化財の修
復・保存に必要な手すり紙の
原料となるノリウツギの採取が
標津町で始まった、というニュー
ス番組を見ました。全国的にノ

リウツギが枯渇していることから文化庁の補助を受け
て同町が実施、今後は栽培も視野に…というものでし
た。シカの食害などによる資源量の低下や採取する後
継者不足も調達を難しくしているとのこと。自然素材
の確保や伝統技術を継承する今日的課題はアイヌ文
化においても同じです。



次回のテーマは「エモ(ジャガイモ)」
本田優子(札幌大学教授)が担当します。



ウポポイ

NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間

JR白老駅から徒歩約10分



ウポポイPRキャラクター
「トウレツボン」



イランカラテ
「こんにちほ」からはじめよう。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団副理事長。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■山丸ケニ(やままるけに):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団職員。ウポポイでアイヌ語体験プログラムを担当する。